

# コロナ禍での子どもたちの発達と健康

～大切な人の笑顔を見ずに子どもは育つか～

○企画・司会 田中真介<sup>1</sup>

○話題提供 田中真介<sup>1</sup>・山本英彦<sup>2</sup>・古賀真子<sup>3</sup>

○指定討論 戸松太一<sup>4</sup>・横井川美佳<sup>4</sup>・本原琴美<sup>5</sup>

(<sup>1</sup>京都大学国際高等教育院、<sup>2</sup>医療問題研究会、<sup>3</sup>コンシューマネット・ジャパン、<sup>4</sup>京都大学大学院、<sup>5</sup>竹富町立大原中学校)

キーワード：コロナ対応、保育・教育、ワクチン被害、精神的健康度、自己認識、他者理解

## 【企画の趣旨】

コロナウイルスへの感染防止のため、2020年から約3年間にわたって三密回避、緊急宣言、マスク着用、ワクチン接種等の対策が推進された。しかし、これらの対応では、広範で大規模な感染拡大を防ぐことはできなかった。一方で、こうしたコロナ対応によって、子どもたちの健康・発達を阻害する影響が出始めている。基礎的な発達研究、政策分析、及び医療・教育・療育の現場からの報告を受けて、子どもたちの生命・健康・発達を尊重し保障するための、より保育・教育・子育てのあり方について討議する。

...

## 【話題提供 1】

山本英彦「新型コロナウイルス感染症の実態とワクチンの問題点 ～今後の感染症対策・予防接種のあり方を考える～」

新型コロナウイルス感染症（Covid-19）の疾患としての特徴と重症度について、自らのコロナ罹患の経験も含めて示す。一方、日本政府及び厚労省が推進してきたコロナワクチンの効果は、発症予防及び重症化予防のいずれについても疑問で、ワクチン接種者数・接種回数が増えるにつれて副作用による重篤な健康被害が急速に拡大している。しかし、厚労省は医療機関から報告のあった健康被害のほとんどを不認定とするとともに、被害を隠蔽し補償を回避する政策を行ってきた。具体的な副作用被害の実態に関する事実資料をもとに、ワクチンによって超過死亡が増加している実態を示し、国のワクチン政策の問題点を検証する。

ワクチン接種を公的制度として導入するためには、厳密なRCT研究（ランダム化比較試験）等を通じて、そのワクチンの安全性（危険性）、有効性（無効性）、及び必要性（不要性）が明確に確認されなければならない。コロナワクチンはそのいずれにも問題が残されている。とくに0歳～10歳代の子どもたちや20～30歳代の若年層への接種は不要であるだけでなく、有効性や安全性も確認されていない。

新型コロナは、ワクチンでなく高齢者中心に罹患した場合のリスクの高い人々への行政的・医療的支援で乗り切るべき疾患である。コロナ医療崩壊で明らかとなった日本の脆弱な公衆衛生対策を指摘し、保健所拡充やクラスター対応、死亡例対策の必要性と医療体制の整備についても言及する。

...

## 【話題提供 2】

古賀真子「コロナ対応の問題点と今後の医療行政のあり方～保育・教育現場での感染症予防対策を考える～」

1970年代の予防接種禍4大訴訟後、MMRワクチン薬害事件を経て1994年に予防接種法が改正され、国の医療政策が見直されてきた。2000年に入って多くの外国製ワクチンの導入が図られ、複数のワクチンの同時接種による死亡など副反応被害が相次いでいる。2010年には、子宮頸がんの予防のためとしてHPV（ヒトパピローマウイルス）ワクチンの大規模接種によって多数の少女が副反応被害に見舞われた。被害訴訟が提起され、2023年現在、全国4カ所での集団訴訟が証人尋問に入った段階にある。

本当に必要なワクチンや行政や医療現場での対応が模索される中、2020年の新型コロナ発生では感染症対策に多くの改変が試みられた。しかしながらワクチンの導入や法改正、現在も続く接種勧奨には多くの疑問が投げかけられている。医療機関から厚労省に報告されている事例だけでも、ワクチン後の死亡者数は2000名以上に達しており、そのほか心筋炎、心膜炎、血栓症ほか有害事象の報告件数は3万6千件を超えている。報告にまで至っていない被害事例はさらに多いと推定され、健康被害を受けた方たちの救済は程遠い状況にある。

筆者らはワクチンを含むコロナ問題に深く取り組み、HPでの情報発信に努めてきた（<https://consumernet.jp/>）。また免疫学とウイルス学の最新の研究成果をもとに、新型コロナの実態とコロナワクチンについて、副作用被害の問題と被害救済の具体的な方法をまとめた2冊の冊子を上梓した。わが国の感染症対策の歴史を振り返り、世界の流れに逆行する日本の過剰なワクチン依存体質の具体的な実例を示す。今後、子どもから高齢者に至る全世代が、感染症対策としての予防接種にどう向き合うべきかを考えるために最も重要となる基本情報を提供したい。

...

## 【指定討論】

1) 戸松太一「コロナ対応が乳幼児の内受容感覚、表情認知、社会的参照の発達へ与える影響」

情動機能の形成には、内臓-血管系・自律神経系・免疫系等の身体内部の生理状態に関する「内受容感覚」が重要である。コロナ禍での内受容感覚の揺らぎ、また三密回避やマスク着用による表情の遮蔽によって他者の感情の理解が困難となり自己信頼性の発達が抑制される実態を報告する。

2) 横井川美佳「コロナ対応による自己認識の脆弱化～幼児の自画像描画の変化をもとに～」

コロナ前後の幼児の自画像描画の変化を分析した。コロナ後には鼻や耳など重要な顔の部位を描かない傾向があった。三密回避やマスク着用などのコロナ対応によって相手の表情や気持ちの理解が困難となっている可能性がある。

3) 本原琴美「コロナ対応による思春期の精神的健康と自己信頼性への影響～小中学生へのアンケート調査～」

小学3～6年生180名、中学1～3年生119名を対象に「一般健康調査」と「自己理解アンケート」を実施し、思春期の心の健康と自己信頼性へのコロナ対応の影響を検討した。小5女子と中1～3女子で自己理解のネガティブ度が高く、精神的な健康度が特に低下していた。コロナ対応と心の健康及び自己信頼性の発達との関連について討議する。

...

## 【参考文献】

田中真介・塚田直也・横井川美佳・本原琴美(2022)「幼児期・児童期・青年期の自己信頼性の発達診断と保育・療育」一日本応用心理学会第88回大会発表論文集

(たなかしんすけ、やまもとひでひこ、こがまさこ、とまつたいち、よこいがわみか、もとはらことみ)